

『東方』二九一号より

小型ながら密度の濃い注釈書

高木 重俊(北海道教育大学)

昨年十一月、岩波文庫に松浦友久・植木久行編訳『杜牧詩選』[赤二二―一]が加わった。文庫判の体裁ながら、中味は濃密である。当初、本書は松浦・植木の両氏によって執筆される予定だったが、作品を選定し執筆上の役割分担を決めてほでない二〇〇二年九月、松浦氏は急逝された。かくて師弟の固い縁から企画された本書は、実質的には植木氏の単独著作となり、先師の学恩に報いんとする著者の気概が、全書に溢れている。本書を紹介するにあたり、杜牧に関するわが国の注釈書について触れておこう。

杜牧(八〇三―八五二)は、日本人に愛好される詩人の一人である。イメージが鮮明で着想力・造語力に優れ、豪健俊爽・清麗淡雅と評される彼の詩風(本書あとがき)が広く共感を呼ぶのであるが、彼の詩に汪溢する抒情もまた、日本人の好みに合致するものだっただろう。杜牧とほぼ同世代で深い交遊関係にあった詩人張祜(七九二?―八五四?)は、「池州の杜員外の杜秋娘詩を読む」という絶句の前半で、「年少 多情 杜牧之、風流 仍お作る 杜秋の詩」と詠じた。この「多情・風流」は、わが国でも杜牧の定冠詞となった。杜牧の七言絶句一七首と七言律詩二首を収める南宋・周弼撰の『三体詩』が、古く室町期から愛読されたこともあって、杜牧に対する邦人の親近感は強く、かなりの注釈書が書かれている。比較的近年のものを挙げよう。

①市野澤寅雄『杜牧』

松浦友久・植木久行編訳

『杜牧詩選』

文庫判・四四八頁・岩波書店・九四五円



(漢詩大系一四、集英社、一九六五年八月)

②市野澤寅雄『杜牧』

(中国詩人選六、集英社、一九六七年九月)

③荒井健『杜牧』

(中国詩文選一八、筑摩書房、一九七四年二月)

④石川忠久『漢詩をよむ 杜牧一〇〇選』

(NHKライブラリー一八八、NHK出版、二〇〇四年十月)

⑤松浦友久・植木久行『杜牧詩選』

(岩波文庫、二〇〇四年十一月)

は同じ著者による本邦最初の総合的な注釈書で、杜牧の四百余首の作品から、A5判のには一一〇首、B6判変型のは八〇首を選録し、両者に重複する三三首を除くと、で計一五七首を選び収める。は杜牧の人と文学に対する概説書で、約三〇首の作品に訳注を施す。はNHKラジオ第

▼『東方』291号より

一 小型ながら密度の濃い注釈書

▲ 高木 重俊

二放送のテキスト『NHK漢詩をよむ 杜牧』（一九九一年四月）をもとに再編集したもので、一〇六首の作品を収め、平明な評釈を加える。が本書で、一三一首の詩と、代表作として知られる「阿房宮賦」一首とを収めている。

さて、注釈書は、ふつう校勘・訓読・口語訳・語釈・鑑賞などによって構成される。各注釈書の性格や編集方針によってこれらの構成要素に懸ける比重は異なるものの、この中で、語釈は重要な位置を占める。それは、地理・歴史を含む百科的項目や一般的語彙、語感・語誌・文法などの言語事項のように、作品の正確な解釈を導く広範な事項を包括するからである。本書はこの語釈部分において、特筆すべき成果を挙げている。

まず、地理や歴史方面の語釈について。例えば「洛陽秋夕」詩における「天橋」の説明。「洛陽の皇城（官庁街。城内の西北部にある）の南の、洛水にかかる天津橋。城内を貫流する洛水を、天の河に見立てて橋をかけ、天津（天の渡し場）と呼んだ、東都第一の名勝。宮城・皇城地区と都城の中心街『定鼎（門）街』とを結ぶ、交通の要衝でもある」（二二四頁）とある。普通なら「洛陽の天津橋」とか「洛水にかかる橋の名」などで済ませてしまうことが多い「天橋」を、かくも懇切に説明している。唐代の文学的地理や詩跡研究の第一人者として知られる著者の学識が、本書全編にわたって縦横に示される、その一端である。

この方向は、百科項目も同じである。例えば、「関試」。「及第後 長安の故人に寄す」詩の結句「却ち春色を將つて関に入り来らん」について、「入関」の「関」は潼関と関試をかけていると述べたあと、関試について「採用試験を主宰する吏部選院での試験。ただしこの試験は、次年度以降に行なわれる任官試験『いわゆる吏部試』を主宰する尚書

トップページにもどる

省吏部への拝礼をかねた、儀礼的なものとされる。祝賀会の続く晩春三月の実施」と説明する（二六七頁）。礼部の試験に及第した挙子は、吏部に赴いて形式上の試験を受け、「春関」という文牒を発行されて吏部管轄の身分に移るが、この春関を得るための試験が関試で、冬十月から同じ吏部が行なう冬集銓選（吏部銓）と混同する解釈もある中で、本書ではきちんと説明されている。

次に、一般的語彙。例えば「断魂」は、「極度の疲労・悲哀・驚愕などによって、魂が肉体から抜け落ちるように感じられるさま。人間の魂魄は、精神を掌る軽い『魂』と肉体を掌る重い『魄』から成り、そのうちの魂が肉体から遊離する、と考えられた。『消魂』『離魂』の類語」とある（二〇八頁）。語感にも説き及ぶまことに行き届いた説明である。

さらに言語的事項に関しても、平仄互用・平仄倒置・類語・類義・反義など、多方面から言語・文法事項に触れて、丁寧な説明がなされる。

酒旗——「酒旗」の類語。旗・旆は平仄互用（一五五頁）。才俊——「俊才」と同じ。平仄の関係で倒置（五二頁）。

掩映——①おおう、隠す、隠れる、②ちらほらと見え隠れる、の両意を持つが、ここでは②の意。「隠映」「遮映」の類語（二二九頁）。

映——ここでは、おおう意。「掩う」意味は、魏晋期に始まり、唐代頻用された（三二〇頁）。

処——ここでは、「時」の類語。時と処は平仄互用。転句の末に多く用いられる（九二頁）。

猶似——あたかも……のようだ。二字は類義。「猶如」に同じ（二四〇頁）。

見迎——お出迎えを受けること。見は、受身（……される）

から転じて、相手の動作に添えて敬意（……していただく）を表わす。自分の動作に添える「奉」の反意語（二七二頁）。

須——「雖」（……であるけれども）の意。須・雖は、語頭子音が同じ近似音のため通用する（一四五頁）。

借問——ちよつとお尋ねしたい。軽い敬意をこめて問いかける慣用語。漢末以来の詩語である。（曹植「七哀」「白馬篇」など）。「試問」「為問」（為に問う）の類語（二〇八頁）。

以上、紙幅の都合でほんの数例を挙げたに過ぎないが、一般的な注釈書の語釈に比べて、一步も二歩も踏み込んだ説明になっている。これが本書の語釈の基本的スタンスなのである。

詩の解釈でも、著者の見識が随所に現れ、きわめて妥当で説得性に富む。例えば「禪院に題す」詩（二二一頁）。

航船一棹百分空

十歳青春不負公

今日鬢糸禪榻畔

茶煙輕颺落花風

航船一棹すれば

百分空し

十歳の青春

公に負かず

今日 鬢糸

禪榻の畔

茶煙輕く颺る

落花の風

白髪の齢を迎えた作者が寺院の長椅子に掛け、花を散らし茶を煮る煙を立ち上らせてゆく晩春の風に身をまかせて、華やかだった青春の遊蕩の日々を回想するという構図で、しみじみとして甘美な感傷が漂う秀作であるが、前半は解釈が分かれる。まず「船」は、獣角（あるいは木や青銅）で作った大杯、また、船の形をした大杯とも。一棹で一気

トップページにもどる

に船を押しやる迫力をもって、大杯を呑み干すのである。承句の「公に負かず」の「公」は、前掲では「人にひけを取ることはなく」と訳し、『晋書』「畢卓伝」にある西晋の畢卓が「酒数百斛を船に満たし、四季の珍味を船首と船尾に置き、右手に杯を、左手にカニの鉗を持ち、酒の船の中で泳ぎ回れたら、一生を終えるに十分だ」と言っただけという記事を引く。「公」とは、大酒飲みを指すと解しているようである。次に、村上哲見『三体詩』上（中国古典選、朝日新聞社、一九六六年八月）は、「公」を「乃公」（わがはい）と解し、さらに、「盃」を指しているかも知れないと言う。前掲では「酒」であるとす。さらには『晋書』の記事と詩中の「船」の語とを関連させ、「公」は「畢公」、つまり畢卓を指すとす。そうするとは、「十年の青春は酒豪の畢公の伝統に背かないものだった」の意味になる。では「公」を「乃公」に解し、「十年に及ぶ青春の日々。杜牧よ、私は公の本性に負くことなく、思うがままに生きてきた」と訳す。語釈で著者は、「船」が李賀の「河陽歌」にある語であると指摘しているが、李賀は杜牧が伝記を書いた詩人であり、その李賀に「惱公」（おれさまを悩ませるもの）と題する詩があることからしても、「公」は「乃公」と見るのが妥当であるし、著者の訳にも、自身に語りかける杜牧の思いが十分に現れている。さらに著者は「茶煙」の語釈で唐代の一般的な茶の飲み方である「煮茶」の説明を行ない、晩年の杜牧が消渴（糖尿）病を患って酒をつつしんでいたことをも言う。これも親切的な説明である。

本書は煩雑を避けつつテキストの校勘に配慮し、手厚い語釈の中に先行詩文を効果的に織り込み、補注には先行研究文献が列挙され、さらに難読字に限定せずルビが豊富に付けられている。著者のこの丹念な作業が、杜牧の詩的感

性を今に伝える口語訳につながるのである。
本書は、詩人杜牧の詩と人生をみごとに浮かび上がらせた
ただけではない。杜牧が晩唐に位置するゆえに、本書を
じっくり読み込むことによって、唐詩全体を理解し把握す
るのに役立つ。刊行後半年も経たないうちに第三刷が出た
のは、まさしく本書に対する正当な評価の反映なのであ
る。

トップページにもどる